から、まだ著述も之と云ふまとまつたものはなかつた。之も殘念の一つではあるが、生きた著述を大分してゐる筈である。それは彼が精神を吹き込み薫陶し、養成した幾多の弟子である。中學校長時代の生徒で高師でも又弟子となつた秀才で今既に故郷の中學校長に赴任したのもゐる。あれなどが遺志を紹いで大にやつてくれるであらう。三人の遺兒も皆聰明だときいてゐるから、乃父の志を紹ぐものもあらう。しかしたつた三十八年のじみな足跡を殘して其のまゝ逝つて了つた故人の心を思ふと、涙なきを得ぬ。まだ〳〵仕殘した事が多からう。殊に渾沌たる中國の先途も見屆けずして行つて了はねばならんのは心殘りであつたらう。國際共同管理の說さへ唱導さる程に紊れ果て、墮落し果てた政界の現狀を目睹し乍ら逝かねばならぬ身は悲しかつたであらう。かうして故人と予との交りに關する思ひ出をかき綴れば、日を重ぬるとも盡きぬであらう。しかし其れは

割愛せう。只、終りに故人との交りを偲ぶにつけても、道友諸君に勸めたき事は機會があつたら、人種、言語、國籍を異にする人達と心をひらいて交りなさいと云ふ事である。僕は今、故人の靈に虔んで過去十八年のあつい友情に感謝する。殊に君によつて四海兄弟と云ふ概念を體驗さしてくれた事を深く謝したい。君の眞情によつて僕は國や人種を超越した、コスモポリタンとして、宇宙の一民として、人と人とが相交り得られる高尙な世界を經驗さしてくれた事を深く〳〵感謝するのである。故人と予とのやうな交情が各國主要の地位にある人々の間に、青年時代から結ばれてゐたら、其の國際關係は現狀に比してどれ程、平滑に平和に行はれたであらう。スチユアートミルは尊敬すべき良妻を有ちしが故に、婦人解放思想の先鋒者となつた。尊敬すべき母や姉や妻を有つ人が、どうして其の母、其の姉、其の妻の屬する「女性」其のものを侮蔑出來やう。一國と一國との關係も亦然りで、外國に特定決體の個人的交りがあつたら、親しい尊敬しあへる友達があつたら其人の屬する國をどうして不公平に惡んだり、虐げられたり出來やう。かうして國を異にし言語を異にし人種を異する者の間にも、相交り相親しむ機會が將來ます〳〵多くなるに從ひ、國人と國人との理解同情がより深くなり、國際の軋轢不和はより少くなり、いつかは人類全體の平和國が實現されるのであらう。之が天意ではなからうか攝理ではなからうか。故人と稀有の因緣によつて予は百年五百年後に各人によつて味はれるかもしれぬ此のありがたい心の經驗を味はれた事を今しみ〴〵と故人の靈に謝するのである。今、此の筆を收めんとして、はしなくも東坡の「與君今世爲兄弟。又結來世未了因」の句を憶ひ起した。乃ち、今世にて結んだ十八年の友情はブツリと茲で斷れたのではない。未了の緣を又來世にて結ばう。嗚呼李厚本君は、俺には何も云はずに逝つた。今頃は其の遺骸を納めた大きな柩が北京からあの遠い雲南の地へ送られてゐる途中であらう。やがては西藏に近いあの大理の蒼山の麓の墳塋へ埋められるのであらう、一緒に馬をならべて逍遙した、あの蒼山の奥つきで安らかに眠るのであらう。いつか又、此の思ひ出深い大理の地へ行つて、君の墓前に香花を供へる時もあらう。さらば我が友。

「道」第162号(1921.10)

回教の一改革者

大川周明

予は嘗て本誌に於て、『民族爭鬪の要素としての黑人』と題する一篇を發表し、其うちに阿弗利加に於ける最も有力なる回教徒團體『セヌッスイ教團』に言及する所あつた。該教團に關しては、之を詳かにすべき資料なく、予の叙述は主としてストッダードの『ライジング、タイド・オヴ・カラー』に據つたのであるが、此頃端なく之に關する興味ある資料を得たので、更めて之を讀者に紹介したい。その資料とは、サハラ沙漠横斷を以て世界に其名を馳せたるフォーブス夫人が、該教團の成立その北阿弗利加に於ける活動に就て　本年五月十八日、英國中央亞細亞協會に於て實地の調査見聞を發表せるもの。演說原稿は、載せて同協會雜誌第八卷第四號に在る。

セヌッスイ教團の創立は、比較的新しい。創立者は、シヂ・モハメッド・ベン・アリ・エス・セヌッスイと呼び、一七八七年アルジェリーに生れた。當時モロッコは、北阿弗利加に於て最も盛んな回教の中心であつた。彼はモロッコの美しき都フェズに在るカリウム學院に入學し、七年間修業した。彼は其間、比類なき勉學と、清淨禁慾の生活とを以て、學友に敬服された。

學院を出てから、彼は純正回教の復興を唱へた。彼れは回教を一切の學問より解放すべきを說き、一切の繁瑣なる神學を無價値なりとした。彼れはまた後世に於て回教に纏綿せる種々なる儀禮を無用なりとし、教祖時代の純一に還れと教へた。而して彼れの思想信仰は、當時のモロッコの回教徒から、異端として攻擊された。

一八二九年、彼れはモロッコを去つてアルジェリーに歸り、ラカトに塾を開いて文典と回教法律とを子弟に教授したが、幾くもなく此地を去り、北阿弗利加遍歷の旅に出た。彼れは道々その純正回教を說きつゝ、埃及カイロに到り、名高きアヅハル大學に

入らんとした。然るに彼れの信仰は、カイロ神學者の激しき非難憎惡を蒙むり、ために長く足を駐むることを得ずして、更に去つてメッカに赴いた。彼れはメッカに於て、名高き神學者シヂ・アーメット・イブン・イドリス・エル・ファシの弟子となつた。シヂ・アーメッドは、モロッコに於て大なる勢力を有せるカドリア教團の首長であつた。而して其の思想は、正しく彼れと同一のものであつた。兩人は、其の互に相識るを得たることを非常に喜んだ。

此年、師弟打連れて、ヤマン地方へ傳道の旅に出た。師は不幸にして旅中に病を得て、世を逝つた。而して臨終に際して、自分の信奉者に向ひ、彼れ世を逝る後は、新たに得たる愛弟子を仰いで師主とせよと遺言した。然るにメッカの回教學者等は、また彼れの信仰を悅ばず、種々なる迫害を彼れに加へ始めた。かくて一八三八年、彼れは遂にメッカを去ることになつた。而して此時彼れは、歐羅巴の感化を受けたる一切の文明地方より退き、專ら沙漠の人々に向つて傳道を試むることを決心した。

この決心を抱いて、彼れはサハラ沙漠の中に入込んだ。而してサハラの沃地に住む諸部族に向つて、熱心に傳道を試みた。彼れの熱誠は非常なる成功を以て報いられた。彼れは遊牧アラビア人及び黑人の間に、回教の他の如何なる教團も有せぬほど多數の信奉者を得た。而して回教に於ては、宗俗兩權が本質的に一なるが故に、彼れは必然此等多數の信者によりて、啻に教主としてのみならず、實に君主として仰がるゝに至つた。

純正回教の恢興を生命とせる彼れが、その教團の組織を戰鬪的にしたことは、『劍かコランか』の精神よりして、何等異とするに足らぬ。彼れは其信者を神の戰士として訓練した。彼れは信者に向つて煙草を禁じ、酒を禁じ、珈琲を禁じ、砂糖をさへ禁じ、而して黃金珠玉を裝飾とすることを禁じ、徹底せる

禁欲剛健の生活を要求した。而して唯だ神の爲に揮ふべき劍の裝飾としてのみ、黄金と珠玉とを用ゐることを許した。彼れが諸方に設けたる支部の位置は、實に歐羅巴の軍人と商人とをして驚嘆せしむる軍事的並に經濟的價値を具へて居る。

一八五九年彼れ死して、其子モハメッド・エル・マーディ、十四歳にして父の後を嗣いだ。此頃に於てセヌッスイ教團の支部は、シレナイカに三十八、トリポリに十八を算し、其他北阿弗利加一帶に散在して居た。モハメッド、エル・マーディは、父を辱しめざる賢兒であつた。彼れは、色々な誘惑を斥けて、父の方針を確守し、專ら沙漠の民、並に阿弗利加内部の黒人に傳道し、必要なる個處に支部を設けた。而して此等の支部は、啻に宗教的支配の中心たりしのみならず、次第に政治的支配を信者の上に行ふに至つた。

かくして一九〇二年彼れ世を逝るまで、セヌッスイ教團は、最早一國家の體裁を具へたる團體となつた。而して彼の諸子は、尚ほ幼弱なりしを以て、從弟サイド・アーメッド後を嗣いで今日に及んで居る。而して今日では英伊兩國によつて、一個の政治的團體として承認せられて居る。この教團の將來の發展が、北阿中阿の精神的並に政治的發達の上に、見逃がすべからざる役割を勤めることは疑ふべくもない。

道友故李厚本君傳

在北京
道會員　林　賢　治

李厚本字培初、雲南大理の人。父文治民國元年第一回參議院議員に當選、袁世凱の反對に遭ひ解散せらる。厚本幼にして聰穎勸學倦まず、十五歳にして大理縣學に入る、時當に前清光緒の末年、外患日に甚しく、厚本憂國の情不禁、奮然舊學を棄て、方言學堂に入り、畢業の後、日本に留學す。當時雲南は邊地と雖も、文武學生他省に比し甚多し。就中唐繼堯、李根源等の日本士官學校に入る有り。此等は皆武力を以て中國五族の革命を志したるが、厚本獨り人心革命を先にするの急務なるを主張し、東京青山師範學校に入る。中國人にして同校に入る者厚本を初とす。卒業後東京高等師範學校に入り、歷史地理を專修し、辛亥革命後歸つて大理第二中學校長と爲り、在任三年當時地方の匪亂方に熾にして、百政頓挫同校亦其難を蒙る。厚本隻身其間を支柱し、危に臨で能く鎮定し、學校賴て以て保完することを得たり。民國四年二月雲南第一中學校教務長となり、次で六月同省十三屬縣聯合中學校長に榮轉し、勤勉砥礪特に同校に高等程度の科程を設け、德育を重じ全校良美の風を養成す。『不欺人不欺己』を本校の校訓と爲したるは、學者の共に賞揚する處なり。民國五年北京高等師範學校學監に榮轉。學監主任兼齋務主任に歷昇し、事を處する勤、躬を持する約、待人誠懇、終日惰容無く、急狀無し。京師風俗日に侈靡に流れ、飲酒屠錢賢者と雖も尚ほ以流弊に染む。厚本獨り皎然として不染、日々書冊に親み、執筆必ず端楷。中國科學の制廢れてより、師弟間の感情日に浮薄となり、人をして學校德育の廢頽を嘆ぜしむるの時、厚本能く誠を以て人を感ぜしめ、人亦必ず誠を以て之に應ず。其病に臥するや、男女學生日に其門に至りて疾を問ひ、校課の忙中に在て學生互に交代し、看護に家務に分擔せる如き、眞に教育家の模範として、厚本の崇高なる人格の表現と觀るべきものなり。厚本憂國の念に篤く、教職に盡すの外、雲